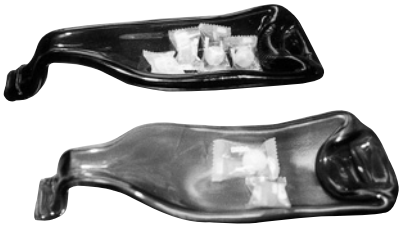
夢追い人



こんな面白いものまで！

ガラスランプの他にも
色々な小物があります

坂井ガラス工房
坂井徳宏さん

今回の夢追い人は、空き瓶などを再利用した、リサイクルガラス工芸に取り組んでいる、坂井徳広さんを取り上げます。

昨年、十月の木工まつりに作品展示をしたところ、とても好評で、注文が来るようになった。紙に書いたデザインや瓶を持ち込んで、「オリジナル製品を作ってほしい」との依頼が舞い込むようになったのだ。

坂井さんが手がけると、捨てられた空き瓶がすてきな照明器具に生まれ変わる。ガラスの壊れものは、洗練されたアクセサリーに…。こうしたリサイクル製品は時代にかなっていることもあって、新聞にも数回取り上げられた。

坂井さんは、本業として家具メーカーの注文に応じて、食器棚や箪笥製品などガラスや鏡を制作しているが、リサイクル製品作りに携わるようになったきっかけは何だったのだろうか。

「十年くらい前、地元有志の集まりである、工芸研究会に所属していました。その影響で、木の端材を使った、小物を作るようになりました。でも、昨年の春先からやはり自分の特徴を出すべきではないかと考えるようになり、本業のガラスを使ったリサイクル製品を作るようになりました。」

坂井さんは人生の方向が見えてきたという。なぜだろうか。

本業のガラス業では、決して味わうことのなかった喜びを得るようになったそうだ。「お客さんがどういう顔をするか、思い浮かべながら作るのが楽しみです。」と坂井さんはいう。少し前、六年生のグラスアートの講師に招かれた。生徒が持参したコップに、名前や模様を浮き彫りにする手法を教えた。生徒たちの喜ぶ顔がうれしかった。「毎日牛乳をそのコップで飲んでいます。」といった礼状も。直接事務所を訪れ、お礼を言われる親御さんもおられた。

自分が係わるもので、これほど喜んでもらえる、と考えると心が弾む。

坂井さんは、現在は、土曜、日曜の夜を利用して、リサイクル製品作りを行っているが、七〇、八十歳頃には、この面で一花咲かせたいと願っている。

提言もある。「今はいらない物はどんどん捨てる時代です。しかし、捨てる前にそれを活かす道がないのか、是非考慮を払ってほしい。」と語る。

坂井さんのリサイクル製品は、工場内に展示してある。注文にも応じる。関心ある方は、TEL0944・86・4465まで。

「家具・花ござの駅」盛況

町おこしの新しい試み

「家具・花ござの駅」が七月二日木室地区にオープン以来盛況だ。

宣伝費を使っていないのに店内にお客の切れ目がない。というのは訪れたお客さんが次のお客を連れてくる、好循環が見られているからだ。

「家具・花ござの駅」は、大川市の家具製造業者九社と花ござ業者一社で構成する「地域町づくりの会」が立ち上げたものだ。メンバー間で「町おこしと大川の活性化」には、大川の特産物をアピールするのが得策と結論づけ、道の駅をヒントに構想を練ってきた。

店内には約千点の商品が並ぶ。「良い物を安く」というコンセプト通り、第一印象はとにかく安い。箪笥やテーブル、椅子、ベットなどはいずれもアウトレットや市場に出す前の試作品である。でも品質はどれも良い物ばかり。

目玉の一つは花ござの「博多極」。知事奨励賞を受けたブランドである。普通高級品として、何処彼処で目にできない商品だ。

花ござ業者の宮崎和喜さんは、「いい品を安くはもちろんですが、健康的で安心して使える品揃えになっています。たとえば、お茶染めのござなどもあります。」と語る。

価格を安く抑えているため、金銭的な付加価値は少ない。でも、業者たちには別の面で利点があるようだ。店内チーフの佐藤久美さん(以前夢追い人に登場いただいた)は「一番のメリットは情報です。来店客にはアンケートに答えてもらっています。これが次の商品作りに役立ちます。それに、土日はオーナー二人づつ、交代で店に出ていただいています。お客の生の声にふれ、見方を新たにする機会となっているようです」と述べる。

地域の特産品、家具のアウトレットを直売する「家具・花ござの駅」。異業者が連携して町おこしを図る新しい試みは、その盛況ぶりから、今のところ実を結びつつあるといえるだろう。

気になった方は
是非足を運んでみては？